

未婚カップルにおける“関係性についての「ナラティブ」”の特徴—語り方と、関係の満足度に見られる介入効果—

小林 志保

<研究の目的>

結婚に至る前にすでに結婚後の夫婦関係の基が築かれていることを想定した上で、本研究では未婚のカップルを対象とし、①面接で得られる関係性についての「ナラティブ（語り方）」そのものの中から、将来の関係や満足度を予測するような特徴が見られるのか、②関係性について語ることにそのものに介入効果があるかどうかを検討することで、婚前カウンセリングに示唆を与える基礎研究を行った。

<方法>

3ヶ月の間において2回の面接を行い、それぞれの面接の前後に関係の満足度を測定した。2回目の面接で介入を行った。各面接と同時に以下の質問紙調査を行った。

①ECR（中尾・加藤，2004）、②拡張版ホープレスネス尺度（高比良，1998a）、③学生用ソーシャル・サポート尺度（久田他，1989）の改訂版、④共感経験尺度改訂版（角田，1994）。

面接Ⅰ：面接はカップルの関係性についてのナラティブを得るためにCRI（Crowell & Owens（1998）；具体的な出来事や、困ったときや失恋についてなどを語らせることにより、カップルの関係性を調べる一連の半構造化面接法である。）によって行った。

面接Ⅱ：カップル継続アンケート（関係継続・面接Ⅰについての会話・困りごとの相談の有無、新たな魅力の発見などの記述など。）をもとに3ヶ月間の様子が尋ねられた。

介入：事前に全参加協力者46名をランダムに2群（満足度Up/Down群）に分け、個人が、提示された満足度の変化をどのように捉え原因帰属するかを伺った。

<結果と考察>

（1）カップルの関係性についての面接（CRI）を行なうことによって、カップル関係の満足度が上昇した。「Secure群」の方が「Insecure群」より満足度は高かったが、「Insecure群」においても面接を行うことで満足度が有意に上昇し、語ることにそのものに満足度への介入効果が見られたと考えられる。

（2）「Secure群」では、「Insecure群」と比較して、3ヶ月を経てもカップル間のコミュニケーションが多いまま関係が継続していたが、CRI後に破局した群は、語りから評定される満足度と面接後の満足度が低く、非共感性が高く、コミュニケーションが少ないなど、継続群とは異なる兆候が見られ予測可能性があったと考えられる。

（3）カップルの満足度変化についてどのように捉えるか、「Secure群」と「Insecure群」の差異を検討したところ、「Secure群」では、満足度が上がっていると提示された人の方が原因の帰属を様々に行う事ができ、内容もポジティブなものが多かった。一方、「Insecure群」では「Secure群」のような柔軟さは見られなかった。したがって、「Secure群」の方が認知的な介入を行なう際比較的使いやすいことが考えられたが、一方の「Insecure群」では、効果が得られるまでに時間を要するか、変容自体に難色が見られる可能性があり、異なるアプローチを用いることも想定する必要がある。そこから、認知的な介入を行う場合には、アタッチメントの査定も重要となることが本研究から示唆された。

<引用文献>

Crowell, J. & Owens, G. (1998). *Manual for the Current Relationship Interview and Scoring System. Version 4*. State University of New York at Stony Brook.